＜巻 頭 言＞

自然環境と人工環境との融合

馬　場　恭　平*

1980年前後から，いわゆる環境問題が提起されてきた。世界的な復興期が一段落して拡張された社会生活がそれなりのレベルで活発となると共に周辺状況を見つめる余裕がでてきた。一方ではなお人口増大による社会生活場の拡張を余儀なくされ，他方ではより高いレベルの社会生活が求め続けられている。限られた規模の地球上には今尚このような進展が望まれている。

拡張され続けている社会生活で人工環境を形成しつつ限られた自然環境の一部となりつつある。この形態はさらに変動して行くものと予測され，20年前提起された環境問題の論点は必ずしも現状の形態に即したものとは言えなくなっていると考える。常に現状の形態とその変動を予測したもので考えて対応して行きたいものである。

我が国を例にとっても，洪水・地震の厳しい天然条件のもとで，世界に例を見ない高度の社会生活レベルに達することが出来ている。これは厳しい天然条件を克服して社会生活の場を拡張し，高質度のエネルギー供給が有り得たからである。こうして形成された人工環境が，ある面では自然環境と共存し，またある面では自然環境を阻害しているという両面の存在が現実である。

人工環境は社会生活レベルによって形成されるものであるから，自然環境との接触面を一概に論じることは出来ない。環境問題を世界的に同一スタンスで論じられない所以である。さらに人工環境は一国・一地域での特異性に注目して論じなければならないこともあ

* 国際大ダム会議副総裁・㈳日本大ダム会議 国際分科会長
(㈱ケイ馬場エンジニアリングコンサルタンツ 代表取締役)

る。自然環境についても然りである。この分別を疎かにしての論戦が往々にしてなされている。この論戦者達を3年ほど前からヨーロッパの一部では懐疑的環境保護者（Skeptical Environmentalist）と名づけて，彼等の言うとおりにしたら際限ない資金が必要だと非難し始めている。そして環境問題は，まず清水の確保，次に教育と食料・エネルギーの確保，そして旱魃・洪水の軽減が重要課題であるとしている。そのまま一部は我が国にも取り入れられる主張であろう。

我々の社会生活は人工環境の中で活動しているのであるから，この人工環境は必要条件である。そしてこの人工環境はとりもなおさず拡張された自然環境の一部として共存していかなければならない。すなはち現代の環境問題は自然環境・人工環境の総合された場で論じ，融合・共存を求めることが必要条件である。自然環境問題のみに偏ることなく，人工環境に生活活動の場があることを踏まえた上での論議が進められることが望まれる。その第一段階としてまず自然・人工両環境の共存というバランスをとるように努力する。その際必要なことはオール　オワ　ナッシングの考え方を捨てて，より良いバランスをとるための要素を見つけ出すことであろう。環境問題論議で最も要求されるものはこの考え方の理解と実施である。そうすることにより人工環境が自然環境に融合されて，グローバルにおいても21世紀の融合された環境の下で夫々のレベルでの平和で楽しく活発な社会生活活動が得られることを期待する。そのためには今後ますます我々の努力と実行が求められるものと強く考えている。